



男は 痛い !

國友万裕

第21回

『ビリギャル』

1. ツギハギの人生

今、俺は部屋の明かりを消して、ベッドに横たわり、MacBook Airを開いて、この原稿を書こうとしている。しかし、なかなか話が浮かばない。浮かんでも、この話は公にするには差し障りがあるのではないかと、前にも書いたようなことだからと思って、途中でやめてしまう。

思えば、昔はもっと書けた。次々にネタは浮かんできた。しかし、ここにきて、浮かんだネタを文章化するのが辛くなってきている。それは一つには昔のトラウマ的なエピソードを文章にしようとするとうトラウマを再体験しなくてはならなくなる。俺は充分にトラウマの分析はしてきたので、もうこれ以上する必要もない。これ以上しても得るものはないだろう。生活のすべてのことにだいたい諦めも付いてきた。これは悪い意味ではなく、人生なるようにしかならない、ジタバタしても始まらないという開き直りが出てきて、それほど深く考えなくなった。自分の心の中にもやもやしているものがある頃は文章化することでそれを整理しようとしていたのだが、もう今となっては、整理すべき事柄もほとんどないのだ。

そうだ、そう考えれば、俺は幸せ者なのである。日本では、50代の男が、一番自殺率が高いし、幸福度が低いと聞いている。しかし、俺は自殺したいとは思っていないし、不幸だとも思わない。そういう境地までついに達してきたのである。美輪明宏さんが「負の先払い」という言葉を使われるけれど、俺は10代20代の頃に一生分の苦しみを経験し、負の先

払いを済ませてしまった。年齢を重ねるごとに幸福になってきている。

今でも断続的に怒りの感情が湧いてくることは事実だ。小学校の頃の男子にばかり体罰を与える女性教師、中学の頃の男子生徒を裸にする横暴な体育教師、不登校の時の保守的カウンセラー、大学の時の偽善的アカハラ指導教授、弱い女を武器に俺を口説こうとしていた女の子、支配的に俺に友情を求めてきたクラスメートの男子、男性運動で出会ったとんでもない学生運動おじさんたち、権威主義的な元大学教授のおばあさん、専門学校の生意気な女子学生、そして、2年前の何もわかってくれなかった女性カウンセラー。もう会うこともないような人たちなのだが、時々、彼らの顔が脳裏に浮かんで来ては俺を苦しめる。しかし、生活に支障が出るほどではない。嫌な奴との記憶とも付き合っていけばそれで済むのだ。

以前、『キルトに綴る愛』という映画があって、「若い人は完璧を求め。でも年取ったものはつぎはぎの中に美しさを見出すものなのよ」という台詞があった。すごくいい台詞だ。俺の人生も、つぎはぎだったけれど、そこに美しさが生まれ始めたのだろうか。いやな記憶は俺の人生のパッチワークなのである。

2. 徒然な日々

①大学どこなんですか？

11月の初め。「先生、大学どこなんですか？」と学生から聞かれた。学歴を知りたがる学生はしばしばいるのだが、その度に俺ははぐらかして、まともには答えない。「なんで、そんな質問するの？ 大学の名前を言うてしまう

と、そういう先入観で見られるだろう？ だから俺は言いたくないんだ」という具合にすり抜けるのだ。

本を出した時も、出版社から「経歴のところに学歴は載せないのですか？」という問い合わせが来た。その時も、「私はもう卒業してだいぶ経ちますので」と答えて、載せることを拒んだ。俺は3つも大学に入っている。学部、修士、博士と3つ違った大学に入っていて、そのことは大きなコンプレックスとして残っている。この頃は学歴ロンダリングと言って、不本意な大学を卒業した人が、大学院で希望のところに行って、最終学歴を塗り替えるというケースが増えている。しかし、俺の場合は、ロンダリングにはなっていない。仕方がないから大学を移ったというのが本当のところであり、本意な選択ではなかったからである。俺は今でも履歴書を書くのが嫌だ。めちゃくちゃな経歴。三つも大学に行った上に、高校が中退なわけだから、「わけあり」であることは一目でわかる。

対人援助学会は立命館の先生や学生が中心の学会である。そのマガジンで立命館を批判をするのは憚られるのだが、真実を書かなくては、この連載の意味はないので、ご了承願いたい。俺の立命に対するわだかまりはものすごかった。実は衣笠界限に行くのすら憂鬱だった。俺にとってはトラウマの地。最近になって、中村正さんがだいぶ友達になってくれたので、この大学関連者で親しい人がやっと一人できた。しかし、正さんは立命の生え抜きで教授や理事にまでなった人だ。俺は上手いかなくて、そのあと、他の大学へと渡り鳥。同じ大学を出ているのにこの違い！ 人生は理不尽だなあ。

人はなぜ、他の人の学歴を知りたがるのか。それはその人のイメージの指標になるからである。しかし、俺は立命館というイメージに合わない学生だった。俺の世代で立命館の卒業の人は、「学費が安いからこの大学を選んだ」という人が結構多い。実際にはそうでなくても、そう言うておけば、他のところに落ちてきたといわずに済む。当時の立命館のセールスポイントは庶民派で学費が安い、奨学金が取りやすいということだった。

しかし、俺は何を隠そう元祖ワンルームマンションだった。当時の立命館というと4畳半にインスタントラーメンというイメージだったけど、俺はその当時からエアコンまでついた家賃が4万以上もするマンションで暮らしていたのだ。ちなみにあの頃は1万円から2万円くらいの共同炊事、共同便所で暮らす学生が多かった。従って、学費が払えない苦学生ということ自分を立命に行った理由にすることができないのだ。なぜ、お金がないんだったら、あんなところで暮らすんだ？と言われることになる。

じゃあ、他の大学に落ちて泣く泣く入ったのかという決めてそういうわけでもない。受験の時は合格しないと思っていた。俺は英語の力だけはあったけど、国語と社会は良い時と悪い時で差があった。3年も学校に行かなかったというブランクは大き過ぎるくらいに大きかったのだった。

俺は受験の直前まで京都の大学なんて考えたこともなくて、東京の大学に行きたかった。しかし、ブランクは取り戻せない。でももう1年浪人はしたくない。仕方がないから日程と受験地の都合で、立命館を受験してしまったのだ。立命館は地方試験がある。俺は大学

に入るまで、立命館どころか、京都にすら来たことがなかったのである。何も知らず、下見もせず大学に入った。今思えば、見合いもしたことのない相手と結婚したようなもの。でも入学を決めた時は、それはそれでいいんだと思ったものだった。入ったところで頑張れば、おのずと道は開けるのだと思っていた。

俺が高校も行かずに大学に行ったことを知っている人は、「高校も行かずに立命館に受かるなんて大変なものじゃないの」と言ってくれる。しかし、高校に入っていないことは、そうそうおおっぴらに話すことはできない。したがって、なぜ、あの大学に入ったのかと聞かれた時に、即座に答えられるちゃんとした理由がないのである。

立命館に愛校心を持っている人もたくさんいる。しかし、これは俺の偏見なのかもしれないが、そういう人は、大概、立命館のここ悪いところが好きだ、ダサい所が好きだという。スポーツで弱いチームを応援するのと同じ心理である。しかし、俺はダサいものに魅かれる人間ではない。洗練された、綺麗なものが好きだ。俺はハリウッドスターが三度の飯より好きな人間なのだ。

俺は大学の頃は前向きだった。ここに巣をつくろうと思っていたから、立命館を自分のアイデンティティにしようと思って、必死で頑張ったものだ。ところが、あの頃は全てが裏目に出た。

挙句に、卒業間際になって、指導教授からアカハラをされてしまった。憎しみの残るような形で俺は立命館を後にした。それから語学系の院の修士に入り、その大学の指導教授とは上手く行ったのだが、当時その大学には博士課程がなかったため、兵庫の大学の博

士に行った。移り過ぎなのがマイナスだとは色々な人から言われてきた。どこの学閥にも属していないので、就職が決まりづらいのである。俺は立命館を恨んだものだ。「あの大学に入っていなかったら」という気持ちを常に抱えて、40代までは生きていた。

しかし、もう52歳。さすがに大学に対する囚われは抜けてきた。この歳になって、非常勤歴も24年、著書も2冊出した、もう誰も俺の経歴に文句はつけない。前にある学生に「俺の経歴はつぎはぎなんだよ」と言ったところ、「つぎはぎの方がカッコいいじゃないですか」と言われたことがあった。そうなのだ。若い大学生でも、凸凹のないスムーズな道を歩んだところで、カッコいいとは思わないという子はいるのだ。今思えば、大学時代は、自分の膿を出す4年間だったのかもしれない。70歳くらいになったら老後の楽しみで、どこかの大学で博士号をとろうかなあと思っている。かすかな夢だ。夢は叶わなくてもいい。ただ叶うのならば叶えたい。そんな気持ちで今は生きている。

②専門学校の同窓会

10月の末。専門学校の教え子たちとの同窓会だった。参加者は10人くらい。先生は俺一人だった。

俺にはコンプレックスがたくさんある。まずは顔がでかいということだ。俺は今まで俺より顔がでかい人に会ったことがない。もう32年ほど前、シェールの主演で『マスク』と言う映画があった。実話に基づく話だが、シェールの息子がライオン病という顔がライオンのような奇病という設定になっていた。俺はまさにこのライオン病なのではないかと

思うくらい顔がでかくて、奇形に近いのである。中学の時の制帽も俺だけ60センチだった。バイクの時のヘルメットもXLだった。ほとんど特注のレベルである。そのことだからかわれた経験は数知れない。しかし、顔が大きいことが悪いことのように言われ始めたのは比較的最近のことで、タモリが言い出したことなのではないかと思う。昔は舞台演劇などでは顔がでかい役者の方が表情が客席から見えるので好ましいとされていたはず。ところが、テレビ時代になると顔が大きいのは不恰好と見做されるようになった。今はスマホ時代。写真を撮る頻度が著しく増えているので、俺みたいな顔のでかい人には困る。いつも目立たないようにちょっと他の人と間を置いたりしながら写真を撮っている。また連写してもらおう。連写すれば一枚くらいはましなのが取れるからだ。同窓会の写真はなかなか上手く撮れていて、Facebookにアップできた。

小さな小部屋であぐらをかいて、「専門学校の仕事は地獄だったよ」と教え子たちに話した。彼らはもう卒業して何年も経っているし、大人の年齢だから言ってもいいかと思ったのだ。「そうなんですか」と彼らはキョトンとした顔。大人になったとは言っても、まだ20代なかばの彼らには、先生の苦労がわからない。前号にも書いたが、あの頃のトラウマもまだ癒えてはいない。しかし、専門学校を辞めた後、良い仕事は続いてやって来た。専門学校は俺が成長するための通過点だったのだろう。ちなみに、この日は仕事で来ていなかったが、この時の同窓生と同期だった男子の一人とはラインまで教え合って、父と息子のような仲である。この冬はスキーに行こうかと話している。苦しかった9年間は無駄ではなかった

のだ。

③髪健康優良児

11月ある昼休み。大学の控え室で髪の話になった。俺は髪健康優良児である。ヘアサロンに行くと「毛の量が多いですよ、絶対ハゲないタイプの髪ですよ」と言われる。「いいなあ」と他の先生たちから言われた。

メンズリブの男性たちもハゲかかっている人が多いので、羨ましいと思うのかなあ。そういえば、プロジェクトに関わっていた頃、他のメンバーの人たちが、やけにハゲ問題にこだわるなあと思ったものだった。俺はハゲの心配がないので、ハゲ問題なんて考えたこともなかった。人間は無い物ねだりで、自分が持っていないが他人が持っているものは価値あるものだと思うのに、自分が持っていて他人が持っていないものはたいしたものと思わないものらしい。

しかし、「俺は髪が多いんだ、ハゲている人、かわいそう」なんていう態度をとるような男には成りたくない。俺は自信がない男だと言われるが、自信家は嫌いだ。自慢話も嫌いだ。むしろ俺の美点は、人の良いところを見つけられるところ。俺は人を羨ましが性格なので、自分よりも他人の方が幸せに見える。だから、その人の幸せな部分を即座に探してあげることができる。そのことには自信を持っているのかもしれない。

④ラグーマンになりたい。

この頃、周りの人におおっぴらに話している。「俺は五郎丸が好きだし、ああいう身体になることを目指しているんだ(笑)」と。これは冗談ではなく、ある程度本気だ。普段、俺

はラグーシャツで外出することがある。元々ガタイはでかいので、ラグーシャツは似合うと周りからも言われる。テニスも、ガタイのでかい人は少ないし、水泳も筋肉マンでは泳げない。野球もタンクトップが似合うような身体になってはならないらしい。やはり、俺の体つきに一番、似合っているのはラグビーだ。五郎丸を目指すのが一番いい。

俺の友達は何故かラグビー経験者が多くて、普段マッサージに来てくれる30代の男性、東京に行ってしまった鍼灸師の先生、卒業前に風呂に入りに行った教え子、専門学校時代の教え子など、ラグーマンだらけだ。スポーツクラブで、普段レッスンしてくれる若い男性は大学生なのだが、彼もラグビーの経験者のことである。この人は、俺が友達になりやすいタイプの人なので、スポーツクラブでもよく話をしている。ラグビー部にいるって、どういうものなのだろう。俺は水泳は長い間やっていたが、チームスポーツはついにできないままだ。

スポーツだけじゃない。俺は誰か気の合う友人と二人で、食事や温泉に行くのは好きだが、大勢で騒ぐのは好きじゃない。俺は変わり者なので、大勢だと浮いてしまう。目立ち過ぎて話の肴にされるか、隅っこに追いやられるかどっちかだ。あー、悲しい。大勢だとむしろ疎外感を抱く。一対一の付き合いの方が相手を独占できるから、俺には向いている。

しかし、男ばかり大勢の世界。男同士だから結びつける世界。そういう世界に一度入ってみたい。60になったら、おじいさんラグビーを始めようかなあーでも、仲間が見つかるだろうか。

⑤孤独に生きる

11月のある日。母と電話で話した。弟の婚活がうまくいっていない。「二人とも孤独に生きていくのかと思うと、私は心配だわ」と母は言う。母が元気なうちに弟が結婚できたらなあと思う。弟は結婚を望んでいるし、俺みたいに女性恐怖でもない。母も、弟の方が気がかりらしい。母は、俺は結婚することはないだろうと思っている。俺が女性から受けたトラウマのことは、母にはずっと話してきたから、俺が女性不信になるのも仕方がないと理解してくれている。それに俺は長いこと一人暮らしをしていて、今は友達も多いから、一人で生きていくことに慣れてしまっている。しかし、弟は大学時代をのぞいて、ずっと母と同居しているので、身の回りのことは母に頼ってきている。そんな弟が一人きりで大丈夫なのだろうかと考えているのだろう。

変な女と結婚したら余計に不幸になるから、一人でも構わないと俺は思うけど、やはり母は、パートナーがいた方が幸せだと思っているみたいだ。かくいう俺もいつまでも友人や教え子が遊んでもらえるかどうかはわからない。孤独でも生きていける心算はしておかなくてはならない。10年20年なんてすぐ過ぎる。老後はすぐにやってくるのだ。

⑥男性学の道は通し

10月末のある日。京都で男性学関連の催しが行われた。俺はこの会議の主催者の男性と6年ほど前に喧嘩して、この会議にも行っていない。この男性と最近男性学の本の翻訳を出された若い男性とのトークが行われたらしいのだが、どうやら異様な雰囲気だったみたいである。その若い男性自身が自分のサイトで

おおっぴらに主催者の男性に対する罵詈雑言を書いている。よほど気に入らないことが起きたのか。

主催者の人は男性加害者の支援をしてきた人だ。本人は加害だけではなく被害のことも理解しているのだと言っているが、実際には加害の人の状況しかわかっていない、これでは男性フェミニストだ、そもそもフェミニストで女性加害を問題にする人がいるのか、というようなことがサイトには書かれていた。この部分は確かに俺も共感する。

これまでの男性学の人たちは、男性を加害者と決めつけ、自分たちは男性性の問題から抜け出した進んだ男だという自負心を持っていたように思う。本人たちは否定しても、俺にはそう感じられるのだ。俺は最初から男性性なんて持っていない。女性性の男である。そこが違和感となって、俺はグループから離れたのだった。

⑦フレーミング

2年ほど前のある日。「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪いわ、って、Oさんが言っていたわよ、ははは」と冗談めかして、ある女性が俺に言った。こういうのを「フレーミング」というのだろう。彼女は「ただの冗談」というフレームを装って、俺を傷つけることを言ったのだった。彼女はもうおばさんだし、俺と限らず、色々な人に言いたい放題いう人で、あれでよくトラブルが起きないものだとは思っていた。

それ以降、俺は彼女とほとんど口をきかなくなった。彼女が話しかけても必要最低限の返事しかしない。できる限り彼女の目を見ない。彼女はまずいことを言ってしまったと感

じ取っているはずだ。しかし、俺はわざと彼女には意地悪したいと思う。彼女はフェミニストたちとの交流もあるし、フェミニストがかった女性だ。そういう女性が、冗談であってもこういう台詞を口にするのは許されない。これを許していたら、ますます男性被害は続いていく。

この頃、彼女はもう俺に話しかけてくることはなくなってきた。俺の方も話すつもりはない。彼女がちゃんとした形で謝るまでは。

⑧女性被害者論

11月9日。ヒラリーが大統領選挙に敗れた。

俺もヒラリーを応援していた。俺はリベラルだから元々民主党支持だが、それ以上に彼女が勝てば、「女だから不利だった」という女性被害者論が言われなくなる。そのことを期待していたのだ。案の定、俺の周りの人たちは、女性だから差別したのだ、女を大統領にしたくないんだと彼女が女性であることを敗因にしている。あー、困った。もちろん、女性だから差別があったことは、敗因の一つだろうが、それを他の男女関係にまで広げられるのは困る。大統領の世界なんて、社会の頂上の世界。その下の世界では男だって差別されている。底辺にいる男性は大勢いるのに、そういう男性に対して、男性だから差別されているなんていう人がいるだろうか。

女だから差別された。男が大統領などトップの座に君臨し続ける限り、こういう決まり文句が言われ続けることになる。男は恵まれているやつでも、恵まれていなくても同じ土俵に立たなくてはならないのに。あー、男はやってられない。

3. 『ビリギャル』(土井裕泰監督・2015)

今回はこの映画を推薦して、終わりたいと思う。えらい大ヒットになった映画である。興行的にヒットしただけでなく、ネットのユーザーレビューも高かった。しかし、俺の率直な感想は出来過ぎ。

実話に基づく話で、成績ビリから慶応に受かった女子を描いていくのだが、親も先生もいい人過ぎるー。それにビリギャルとは言っても、ヤンキーな高校のビリではなく、名門校のビリなわけだから、もともと勉強ができないわけではないしで、そこがちょっと引かかる。

でも暇つぶしにDVDで見るにはいい。気分のいい話だから、若い子はこういうのが好きなのだろう。俺だって、そうだったなあ。若い頃は希望がある。しかし、幾度かの挫折や絶望を経験しながら、人はどこかに流れ着くのだ。俺は52歳で、どうにか自分の人生に納得できるようになった。納得した後は、はて、どういう人生を歩んでいくべきなのか。とりあえず、一日一生。日々を乗り越えるという気持ちで生きるしかない。

男は痛い。でも痛い経験をたくさん積んでいくうちに痛みが快感になってきたのだろう。さあー、10年後の俺はどうなっているだろうか(笑)！？